

明星教育センター活動の目的

菊 地 滋 夫*

1. はじめに

明星大学明星教育センター、通称 MEC (Meisei Education Center) は2010年4月に設置された(以下、MEC と記す)。この原稿を書いている2020年は節目の10周年に当たる。この間、MEC の活動を担い、支え、発展させてこられた教職員、そして学生、卒業生のみなさんに心からの敬意を表したい。

MEC がハブとなり大学を挙げて推進する「自立と体験1」は、この11年間で2万を超える学生たちの学びと成長を後押しした。明星学苑の教育理念を現代社会の文脈で具現化することで、明星大学の歴史にひときわ明るく輝く改革を成し遂げたのである。その活動は高等教育界で注目を集め、高い評価を得た¹。影響は国内他大学に及び、学部学科横断型の初年次教育を実施する大学は次第に増えつつある。全国の大学関係者からの見学、視察の申し込みは絶えない。

佐久間美智子副学長(当時)の卓越したリーダーシップの下で「自立と体験1」の開講と MEC の設置を提案し²、教職員とともに構想を練り、立ち上げから運営まで深く関わる機会を持つことのできた筆者は、なんと幸せであろうか。この場をお借りして、関係各位に改めてお礼を申し上げたい。

この度、MEC のさらなるバージョンアップを牽引する西本剛己センター長より「明星教育センター活動の目的」について寄稿をとのご依頼をいただいた。そこで本稿では、これまで MEC がどのような社会的課題の解決を目指して活動をしてきたのかについて私見を述べる。そして、2020年から世界を覆うコロナ禍にあって、現在すでに到来しつつある近未来に MEC が担うべき使命についても僭越ながら提言したい。社会の課題に正面から取り組み、高等教育の新たな時代を切り拓いてきた MEC には、それを遂行するポテンシャルがあるからである。

2. 日本の高等教育の課題³

MEC の設置を提案し、具体的な検討を開始したのは2009年夏のことである。この時期は、日本国内の大学進学率はついに50%を超え、これに伴い、学生たちの学力や学習意欲の多様化が指摘されるようになっていた。大学での授業についていけない学生たちの中には、留年、休学、退学という道を進む者も目立ち始めていた。明星大学も例外ではなく、この年に入学した学生で留年も退学もすることなく4年生に進級した学生は約2/3であった。このような状況にあって、日本中の多くの大学から注目を集めたのが初年次教育である。初年次教育とは、一言で言うと、高校生から大学生への適応と移行を助けるプログラムである。だが、それをどのように実施すれば効果的なのかという問題をめぐっては、日本中の大学——より正確に言えば、各大学の学部や学科——が頭を悩ませていた⁴。ここでは、学生たちが大学への適応に苦しむことになったいくつかの要因を指摘する。これらはいずれも MEC の活動目的に直結するものである。

* 人文学部国際コミュニケーション学科教授、社会人類学

(1) 専攻の決定

「現代の日本の若者は」と一括りに語ることは無意味かもしれない。高校や中学の早い時期に自分が大学で学ぶべきことをかなり明確に思い描いている者もいれば、反対に、大学に入学してなお自分が何のために入学したのかわからない者も大勢いる。両極の間にはグラデーションもあるだろう。また、後者、すなわち何のために入学したのかわからない者が必ずしも悪いというわけではない。そのような若者こそ、大学で様々なことにチャレンジして自分の可能性を探すのも良いという考えも当然あるだろう。

とはいえ、様々なことにチャレンジする以前に欠席が増え、早々にドロップアウトするという事になれば、それは本人にとってはもちろん、受け入れる大学側にとっても経営的に痛手である。こうした問題に対処し、留年やその延長線上の退学を減らす取り組みとして多くの大学から注目されたのが、前述の初年次教育であった。

だが、「何のために入学したのかわからない」ということは、それほどおかしなことなのだろうか。このことを考える上で、学力や学習意欲が高い学生が多数在籍すると思われる東京大学の調査結果は示唆的である。教養部で2年間幅広く学んだ後で自分の専攻を決めるレイト・スペシャライゼーションが好ましいと考える学生が多数を占め、早い時期に専攻を決める方式を希望する学生は2012年の時点で3割に過ぎなかったのである(東京大学大学総合教育研究センター 2012)。

多くの高校生が志望校や志望学科を絞り込む際に参考にする情報は、受験偏差値、知名度、得意科目、推薦入試に求められる評定平均、就職状況などであり、保護者や進路指導教員の意見も影響力を持つ。しかし、このようにして決められた大学に、自分が取り組むべき学びがあるかどうかは、やはり実際に入学して高校までには知る機会すらない学問分野に触れてみないことにはわからない。いわゆる「社会に出て」様々な経験を積んで、初めて自分が大学で学ぶべきことに本当の意味で気づくことがあっても何ら不思議ではない。

近年、部分的にはあってもレイト・スペシャライゼーションを取り入れる大学は少しずつ増えつつあるようだ。このことは、大学側も高校3年生の時点で専攻を決めることの難しさや、敢えて言えば、ある種の不毛さも認識しつつある兆候でもあろう。

全学初年次教育科目「自立と体験1」の企画立案と運営を通して、新入生一人ひとりが「明星大学に学ぶ学生としての自己理解を助け、各自の理想や目的を明確にしていくこと」は、MECの活動目的の重要な柱である。その背景には、あるべき高大接続を阻む構造的な問題が潜む。次にこの点について述べる。

(2) 初等中等教育との接続

わたしたちのような大学関係者は、しばしば「高大接続」という局面に目を奪われがちかもしれない。しかし、もう少し俯瞰的に見ると、さらなる問題の広がりが見えてくる。端的に言うと、日本の学校教育のあり方が学校種ごとに横割りになっており、幼稚園や小学校から中学校を経て高校へと至る初等中等教育と、大学などの高等教育のつながりや連続性が希薄なのである(安永 2013)。

大学で取り扱う学問領域を初等中等教育の段階で幅広く紹介することは現実的ではないかもしれない。だが、学び方については、大学での学びに求められる姿勢や基本的なスキルを初等中等教育を通して一貫して育成することは可能であろう。しかし、現実はそのようではない。「中学・高校は受験対策の暗記中心の詰め込み教育」で、「大学では主体的・能動的な学び」という分断の実態があった。結果的に、入学まもない大学生は戸惑うことになる。このような学び方の断絶を埋める作業が必要になる所以である。近年では、中学や高校でも急速にアクティブラーニングが取り入れられるようになってきたが、初年次教育に注目が集まった2000年代ではそうした動きは限定的なものに過ぎなかった。

少なからず存在する「何のために入学したのかわからない」新入生に、多様な価値観や考え方を持つ他学部他学科のクラスメートとの意見交換を通して、明星大学に学ぶ意味を一人ひとり考えさせるとともに、主

体的・能動的に学びにコミットする姿勢を身につけさせることは、2010年4月に活動を開始した MEC の大きな目的であった。

(3) 打開の切り札としての学部学科横断クラス

大学で求められるアカデミック・スキルや各学科の基礎を教える科目は、MEC が設置され活動を開始する前からすでに存在していた。もちろん、このことは本学に限った話ではない。各学科の教員は「こんなことまで手取り足取り教えなければならないのか」と戸惑いつつも、多くの場合、熱心に教えた。だが、すでに述べたように、初年次教育科目をどのように実施すれば効果的なのかという問題をめぐっては、多くの大学が頭を悩ませていた。

その主な原因は二つある。第一に、その当時は、中学や高校の教員のみならず、多くの大学教員もまたアクティブラーニング型の授業運営に不慣れだったことが挙げられる。新入生たちに「高校までと違い、大学生は自ら主体的に学ぶものだ」と熱く語りかける一方で、ディスカッションやプレゼンテーションを通して学生たちの学習意欲を喚起して、学びを深く掘り下げる授業を新入生向けにしっかりと展開できる教員は多くはなかった。かく言うわたし自身がそうであったように、知らず知らずのうちに学生たちに「受け身になることを強いる」一方的な授業を実施していたのである。

第二には、まさに「何のために入学したのかわからない」という学習意欲の問題である。モチベーションが高くない学生たちに、教員がどんなに熱心にアカデミック・スキルや各学科の基礎を教え込もうとしても「暖簾に腕押し」になるのはむしろ自然なことであった。もちろん、繰り返しになるが、このことは学生たちの問題であるというよりは、日本の教育制度に内在する構造的な問題である。

こうした問題を前に、MEC をハブとして全学的に実施する初年次教育科目「自立と体験1」は次のような方法を打ち出した。まず、教員の多くがアクティブラーニング型授業に不慣れであることへの対処として、各部局から選出されたすべての担当教員に事前説明会に参加してもらい、授業の狙いや方法について体験的に学習してもらうとともに、共通シラバスのもとで、すべてのクラスが共通の教材と教案を用いて授業を行うという方法を採用した。教員向けニュースレターを配信して授業運営のポイントやヒントを伝えたり、毎週金曜日にランチミーティングを開催して、成果や思わぬ発見、あるいは解決すべき課題などの共有にも努めた。

学生のモチベーションを高める手立てとしては、切り札として、約30名からなる1クラスの中に全学部学科の学生が混じり合うよう学部学科横断型クラス⁵を採用した。「自立と体験1」の最大の特徴ともいえるこのクラス編成は、筆者が所属する国際コミュニケーション学科が実施する海外フィールドワークの授業の一環で東アフリカのザンジバルを訪れた学生たちの経験が直接的なインスピレーションの源泉であった。学生たちは価値観も考え方も異なる現地の人々との「おしゃべり」を通して⁶、新鮮な目で自分自身の生き方を再想像/再創造することができた。

価値観や考え方が異なる多様な学習者が参画することで学びが深まることは、協同学習の知見からも証明されており(パークレー、クロス&メジャー 2009)、学部学科横断クラスの効果は120%の自信を持って期待することができた。事実、開講後10年以上にわたり、様々な特徴を持つこの授業において学部学科横断クラスは最も高い評価を学生から得ている。自分とは異なる学部学科に所属する多様な学生たちとの交流を通して、学生たちは様々な気づきや刺激を得る。このことは、より広い視野から自分の大学生活や卒業後のキャリアを考えることにつながるのである。

(4) サイロ・エフェクトの打破

しかし、学部学科横断クラスの実現は、在学生の休学や退学が止まらない危機的状況にあった本学にあっ

でもなお容易なことではなかった。実現までの検討の過程では、予想通り、激しい反発があったことは今もなお記憶に新しい。日本のほとんどの大学の教学組織は、学部学科等による典型的な縦割り組織になっており、組織間には壁が築かれ、学部や学科を超えた学生の交流を通じた学びと成長を阻害する。

このような現象は、社会人類学者でありジャーナリストでもあるジリアン・テットが言うところの「サイロ・エフェクト」そのものである(テット 2016)。サイロは、気密性の高い建造物であるが、それ故に閉鎖的で相互のコミュニケーションが取りにくい組織の比喩である。大学は、キャンパスが別々の場合はもはや同じ大学とは思えないほど疎遠になりがちであるし、同一キャンパスであっても、学部が違えば教員どうしの交流は非常に限定的なものになる。明星大学も少なくとも 2000 年代くらいまでは、このような状況にあったことは否定できない。

この問題乗り越えて、学生たちの交流を通じた学びと成長を促すことこそは、学部学科とは異なる全学的な組織としての MEC の活動の大きな目的なのである。「自立と体験 1」を実施していくプロセスとは、学生たちのみならず、教職員もまた組織の壁や分断を超えて、改めて、知の共同体、学びの共同体を取り戻す運動でもあった。

(5) 大学での学びを社会へとつなげる

大学での学びの質や成果は、学修者自身が卒業後のキャリアを視野に入れた動機付けができるかどうかによって左右される可能性が高い。それゆえ初年次教育は、中等教育(高校教育)と高等教育(大学教育)を接続するだけでなく、卒業後の進路にも意識を向ける学習内容を含みながら、大学での学びを社会へとつなげる役割を担うことになる。

また、2000 年代以降、日本国内に普及した初年次教育では、アクティブラーニングの手法が用いられるのが一般的である。この学びを通して、知識や技能のみならず、認知的、倫理的、社会的な汎用的能力が身につくとされる(中央教育審議会 2012)。この能力を培い伸ばすことは、大学生活はもとより、社会の様々な場面においても重要である。

以上のように、初年次教育は卒業後の進路にも意識を向けつつ、汎用的能力の基礎を身につけさせることを通じて、大学での学びを社会へと接続していくことが期待される。これらは、全学部学科、そして事務局と力を合わせて全学初年次教育科目「自立と体験 1」⁷を運営する拠点としての MEC の重大な目的である。

3. 規程から見る目的

明星大学明星教育センター規程第 2 条には、MEC の目的が次のように定められている。「センターは、学校法人明星学苑の建学の精神に基づく明星大学の教育の理念及び目的(以下「明星教育」という。)に関する研究・啓発・広報活動、並びに、明星教育の具現化及び学生の社会的・職業的自立促進等に関する教育研究活動を実践することを目的とする。」筆者はこの規程の原案を作成する作業にも直接関与している。ここでは、規程の文言に即して、MEC の活動の目的について改めて語り直しておきたい。

(1) 明星教育の研究

ここで言う明星教育とは、条文にあるように、「学校法人明星学苑の建学の精神に基づく明星大学の教育の理念及び目的」を指している。ここで指摘しておきたいのは、MEC が直接扱うのは「明星大学の教育の理念及び目的」であるが、それは「学校法人明星学苑の建学の精神に基づく」ものであるという点である。このことは、1923 年に創設された明星実務学校に始まる明星学苑の建学の精神(「和の精神のもと、世界に

貢献する人を育成する)を研究することなしには、「明星大学の教育の理念及び目的」を研究することもできないということを意味している。

こうした事情から、MECには自校研究という重要な活動の柱が存在することになる⁸。この場合の自校研究とは、必ずしも明星大学の歴史を研究するだけとは限らない。学苑の出発点である明星実務学校も当然含まれるし、この当時の教育界の動向を、国内のみならず、ときにグローバルな視野から捉え直すことも必要となる。そうでなければ、明星学苑の建学の精神も、明星大学の教育の理念及び目的も、正確にその位置づけや意義を確認することができないからである。自校研究の地道な取り組みは、MEC 職員の長谷川倫子氏を中心に、教育史を専門とする学内外の研究者の協力を得て着実に推進されている。

また、言うまでもなく、学校法人明星学苑は、明星幼稚園、明星小学校、明星中学校・高等学校、そして明星大学を擁している。これらの設置校は、いずれも「学校法人明星学苑の建学の精神に基づく」教育活動を行うものでなくてはならない。だが、同一の学校法人のもとに設置された学校であっても、学校種の間の横割り構造を自動的に免れるものではない。明星高等学校と明星大学が、難なく「高大接続」を果たすことができると思えることはできない。それゆえ MEC は明星高校と明星大学の高大接続を円滑に進めるための研究と教育的な実践を行うことが期待されるのである。

事実、明星高校にも近年「自立と体験」というプログラムが導入され、その計画から実施に際しては、MEC 教職員による積極的な貢献がなされている。さらに明星大学で実施する「自立と体験1」のいくつかのクラスに明星高校の教員が継続的に入り、同科目で用いる教育手法の共有を行うといった活動も始まっている。こうした動きは、MEC が「学校法人明星学苑の建学の精神に基づく」教育を研究する大学附属教育研究機関だからこそその貢献であると言えよう。

(2) 明星教育の啓発・広報活動

明星教育(学校法人明星学苑の建学の精神に基づく明星大学の教育の理念及び目的)を明星大学構成員(学生、教職員)に広く知らしめ、より深い理解へと導くことも MEC の大きな任務の一つである。年1回発行される紀要『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』はその活動の一環である。また、明星大学資料図書館にある明星資料展示室では、MEC が収集した明星大学の歴史に関する資料を展示している。オープンキャンパス等での展示もまたこうした活動の延長線上に位置づけられる。

また、明星教育を具現化する科目である「自立と体験1」を全学部学科から選出された教員が担当することは、結果的には明星教育の啓発にもなっているという点も特筆すべきであろう。建学の精神に基づく明星学苑の教育方針には「人格接触による手塩にかける教育」や「実践躬行の体験教育」が挙げられているが、「自立と体験1」を真摯に担当する教員は、まさにこれらの教育方針を実践躬行することになるからである。わたし自身も2010年以來毎年欠かさずこの科目を担当し、上記の教育方針を実践しつつ、その意味を様々な角度から検討してきた⁹。

さらに、「自立と体験1」担当者向けの事前説明会や、授業実施期間中毎週送付されるニュースレターも、明星教育の啓発としての役割を果たしている。ニュースレターには、授業運営のポイントやランチミーティング¹⁰で共有された成功事例や課題などが紹介される。当初ニュースレターは、授業担当者にのみ送付していたが、全学を挙げた取り組みであり、すべての教員がいつかこの科目を担当する可能性があることから、近年では全教職員が閲覧できるように StarNet で配信されている。

(3) 明星教育の具現化

明星学苑が存在し続ける限り、その建学の精神は変わることはない。建学の精神に基づく明星大学の教育の理念及び目的もまた同様であろう。しかし、言うまでもなく、このことはカリキュラムを永遠に固定する

という意味ではない。それどころか、建学の精神に基づく明星大学の教育の理念や目的が、その時々¹⁰の社会状況や学生のニーズに照らして適切にカリキュラムに反映されているかどうかは不断に検証され、改善されなくてはならない。カリキュラムを構成する個々の授業もまた、教育目標、教育内容、教育方法などが常に見直されていくべきものである。それゆえ、明星教育の具現化とは、明星教育の絶えざる自己更新であり、MEC はこれを全学的に推進する部署であると言える。

2010年度に始まる「自立と体験1」の全学的な実施は、まさに明星教育の自己更新そのものである。「自立と体験1」の11年間は、鈴木浩子先生をはじめとする MEC 教職員によるポートフォリオや教案の地道な改善の取り組みが雄弁に物語っているように、それ自体が明星教育の自己更新でもあった。

この歩みは MEC が存続し続ける限り、今後も止まることはないだろう。後述するように、2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大は、高等教育にとっても歴史的なターニングポイントとなった。世の中にはリモートワークが可能な業種があることも明らかになり、教育の世界、とりわけ大学などの高等教育ではデジタル技術を活用したオンライン授業が、様々な議論を引き起こしつつも、一気に普及した。これを起点に、デジタルと対面を多様に組み合わせた学びがさらに広がっていくであろう。MEC の目的に「明星教育の具現化」がある以上、建学の精神に基づく明星大学の教育の理念及び目的に適う形で、デジタルと対面を多様に組み合わせた学びのあり方¹¹を研究・開発していくことになると思われる。

2008年に、筆者が後の「自立と体験1」の原型となる学部学科横断クラスによるアクティブラーニング型の初年次教育科目「自己実現の基礎」(仮称)を提案した際には、現在の紙のポートフォリオではなく、履修者が e ポートフォリオを使いながら学びを進めていくことを想定し、提案していた。当時は、委員会での検討の結果、わたし自身が時期尚早との判断を下さざるを得なかったが¹²、2020年のコロナ禍の最中にある今こそ、学修者中心の学びを支える e ポートフォリオの到来は確実であると言える。

(4) キャリア形成教育の研究と実践

すでに述べたように、学部学科横断クラスを最大の特徴とする「自立と体験1」では、学生たちはより広い視野から自分の大学生活や卒業後のキャリアを考えることになる。したがって、この授業は初年次教育科目であると同時にキャリア形成科目的な役割も担っている。

この原稿を執筆している2020年時点では、「自立と体験1」は「自立と体験1(大学生活の基盤をつくる)」と表記されるようになってきている。必修であるこの科目に続いて、1年後期配当の選択科目として「自立と体験2(社会の課題と出会う)」が設けられている。この科目では、社会の課題を学生が所属する学部学科の視点から見つめつつ、自らが専門とすることになる分野の学びを意識しながら、他学部他学科の学生たちとともに多角的に検討することを通して、やはり分野を超えて協働することの大切さをも学ぶのである。

その後、「自立と体験」と称する科目は、さらに「自立と体験3A(社会人としての基盤をつくる)」及び「自立と体験3B(就業力を身につける)」へと続く。これらは、「キャリアデザイン A(理論で考える自己とキャリア)」「キャリアデザイン B(生き方と法律・労働・お金)」と合わせて、明星大学での様々な経験と学びを学生一人ひとりのキャリアへと統合していく役割を果たす。毎年実施している入学前教育も加えて、MEC が中心となって実施するすべての授業は、そうした目的を持っているとも言えよう。

4. むすびにかえて——学び続ける大学と DX

2020年からの新型コロナウイルスの感染拡大は、高等教育に途方もないインパクトを与えた。とりわけ日本は他の先進諸国に比べて教育のデジタル化が遅れていると指摘されて久しい。ところが、突然のコロナ禍は各大学に遠隔授業の導入を余儀なくさせ、結果的にデジタル化の流れが加速していくことになった。明

星大学もまた例外ではありえない。最後に、僭越ながら、デジタル化が急速に進む時代において MEC に期待される役割についての展望を私見として述べておきたい。

(1) 遠隔授業の導入

コロナ禍に伴う本学への遠隔授業の導入は、2020年4月より明星 LMS (manaba) を利用したオンデマンド型授業と、Zoom を利用した同時双方向型授業という二本柱でスタートした。筆者は「遠隔授業の導入に係るワーキンググループ」のメンバーとして、4月初旬より教員や学生向けのマニュアル作成などの業務に従事した。部局によっては、ほとんどの授業が前期より Zoom で行われているところもあれば¹³、その逆や、両者の中間的形態などが様々に存在している。しかし、前期は相対的にオンデマンド型授業の方が多かったのではないかと感触がある。

予期せぬ事態に直面して、バタバタと始めざるを得なかった遠隔授業ではあったが、多くの教職員の奮闘努力の甲斐あって、前期をどうにか乗り越えることができた。しかし、LMS に資料と課題が載っているだけで、提出された課題へのフィードバックのない授業に対しては、学生たちは明確に不満を表明していたし、反対に、オンデマンド型授業を選択した教員の中には、連日、膨大な課題の添削や評価に追われ、疲労を溜めてしまうケースも見られた。

そこで、2020年度の後期からは、より積極的な Zoom の活用を促す教員向け資料を作成し、説明会やミニシンポジウムを企画・開催している。実際、前期に比べると、明らかに同時双方向型授業は増加している。だが、そのことで単純に学生の満足度が向上したとは言い切れず、Zoom で一方的に話し続けるだけの旧来型の講義や、相変わらずの膨大な課題への不満は続いている。

この原稿を執筆している2020年12月現在では、次年度に向けて、質の高いオンデマンド型授業をどのように構築するのか、そして、教室で対面型授業を行うと同時に Zoom を用いた遠隔授業も併用する、いわゆるハイフレックス型授業をどうするのか、といった点が課題となっている。

このように様々な課題や問題を抱えながら始まった遠隔授業であるが、ひとつだけ確かなのは、LMS や Zoom の活用により、曲がりなりにも学習と教育のデジタル化が進んだことである。

(2) eポートフォリオ

「デジタル化が進んだ」と述べたばかりだが、その活用は依然として不十分であることも付言しなければならない。そこで浮上してくるのが、2008年から始まった「自立と体験1」の検討作業の初期の段階で導入が検討されながらも、諸事情により採用されなかった eポートフォリオである。

MEC 所属の落合一泰現学長が副学長時代に委員長を務めておられた eポートフォリオ準備委員会では、高大接続から卒業後に至るまでの活用を可能とするライフロングな eポートフォリオが検討された¹⁴。また、それは特定の専門領域の「セントラル」な学びから、落合学長の教育新構想の代名詞のひとつでもある領域横断的な「クロッシング」と総称される学びをもカバーするものとして構想されている。

さらに、eポートフォリオに蓄積されるデジタル化された各種のデータは、データアナリティクスにより教育効果の向上に資することができる上、大学全体や学部学科レベルの IR 活動にも貴重な情報となるだろう。「学び続ける力」と「協働する知性」を兼備した人の育成は、明星大学の特色ある eポートフォリオの実現と不可分である。

2020年度は、コロナ禍により eポートフォリオ導入に向けての準備作業は大幅に遅延しているが、同時にコロナ禍により全面的に展開されることになった遠隔授業を通して、データの活用は、以前とは比べ物にならないほどの現実味を帯びたものとしてわたしたちの前に姿を現している。

では、どの部署が中心となって eポートフォリオを活用した新たな学びを具現化するのだろうか。明星教

育の絶えざる自己更新を使命とする MEC 以外にない、というのがわたしの一貫した考えである。

*

小稿では、かなり狭い個人的な視野から明星教育センターの活動の目的について書き綴ってきた。だが、書き終えようとする今頃になって、MEC がいかに多くの教職員や勤労奨学生たちによって支えられ、愛されてきたのかについてやっと思いが至った。何人もの先生方、職員の方々、学生たちの顔が思い浮かぶ。きっと MEC をめぐる物語は、関わった人の数だけあるのだろう。これからも多くの人が関わり、新しい、それぞれの物語を紡いでいく。すれ違ったり、交わったりしながら、誰にも予見できない展開が生まれてくる。そして、それが明星教育の歴史になっていく。そんな歴史の片隅に関わることができたことを心から喜びつつ、稿を閉じることにしたい。

注

- 1 「自立と体験 1」は 2014 年 2 月に『教育学術新聞』（日本私立大学協会）の企画「授業法が大学を変える」に選出されるとともに、日本高等教育開発協会（JAED）の Good Teaching Award を受賞した。また、2019 年 7 月には第 1 回初年次教育学会教育実践賞において最優秀賞を受賞した。
- 2 筆者が後の「自立と体験 1」の原型となる学部学科横断クラスによるアクティブラーニング型の初年次教育科目「自己実現の基礎」（仮称）を提案したのは、全学共通科目（かつての一般教育科目）を検討する全学的な委員会であったが、ここでの検討は不調に終わった。そのため佐久間副学長を委員長とする全学的な初年次教育を検討する委員会が 2008 年 12 月より発足した。ここから、若手、中堅、女性の職員の活躍があり、構想は具体化し、実現に向けて動き出した。
- 3 筆者は「初年次教育と小中高の取り組み－多様性を活かすアクティブラーニングの可能性」という小論でこの点を検討したことがある（菊地 2018）。
- 4 初年次教育学会が設立されたのは 2008 年である。
- 5 学部学科横断クラスによる全学的な初年次教育を運営するのは難しいけれども、「センターを作ればできる」と助言してくださったのは、2009 年 7 月に本学の全学 FD 研修会に講師としてお招きした山田礼子同志社大学教授であった。その時のことは、まるで昨日のこのように今でも鮮明に記憶している。
- 6 ザンジバルでのフィールドワークは 2006 年に始まり、2019 年までに合計 11 回実施され、この間、延べ 227 名の国際コミュニケーション学科の学生が現地を訪れている。学生たちは、ストーンタウンのストリートの両側に設けられたバラザと呼ばれる腰掛に座り、現地の人々と英語で「おしゃべり」を楽しむ。話題は、お互いの文化や言語、歴史、政治、スポーツ、家族、恋愛、将来の夢など多岐に及ぶ。
- 7 2010 年度に設置された明星教育センターが、その当時、直接運営した正規の授業科目は「自立と体験 1」のみであり、主に 1 年次後期に履修する「自立と体験 2」は学科科目であった。この「自立と体験 2」は、2005 年より開講された全学共通科目「自立と体験」が前身である。ただし、全学共通科目というカリキュラム上の位置づけながら、授業の企画や実施は、実質的に学部学科単位で行われていた。
- 8 明星大学明星教育センターのウェブページには、次のように記されている。「明星教育センターでは、下記のような明星大学の歴史に関する文書、写真、記念品などの収集し、保存を行っています。収集した資料は、後世に伝えるとともに、明星大学史を知るための展示活動等に使用します。」<https://www.meisei-u.ac.jp/facilities/mec/mec-kizou.html>
- 9 例えば、筆者は、「人格接触による手塩にかける教育」が有効なのは学生 - 教員の間のみならず、学生間の人格接触の関係においても意義があると考え、「自立と体験 1」の学部学科横断クラスでは、学生間の違いが優劣ではなく相対的な差異として捉えられるため、他者を見下さず、互いに尊重しあえる、健全な自尊感情が育まれる環境があるという点を論じたことがある（菊地・御厨 2014）。
- 10 わたしは「自立と体験 1」のランチミーティングほど心躍る会議を知らない。これほど純粋に教育者が熱く語り合い、学び合う場が他にあるだろうか。
- 11 対面でのファシリテーションをも包含する「デジタルファシリテーション」（田原真人氏）がこれからの教育のカギを握る、というのがわたしの見立てである。

- 12 当時、eポートフォリオを実用化していた大学は、知り得た範囲では、関西国際大学や金沢工業大学などごくわずかであった。また、eポートフォリオではなく、紙のポートフォリオを採用したのは、教室でのライブ感のある活用には紙の方が適しているだろうとの判断もあった。
- 13 筆者の所属する人文学部国際コミュニケーション学科は、前期からほとんどの授業科目がZoomを用いた同時双方向型授業であった。同学科では、コロナ禍が到来する以前より、英語や中国語といった語学関係の授業のみならず、圧倒的多数の授業がアクティブラーニング形式で実施されていたことが、同時双方向型授業が多用された背景のひとつであると思われる。
- 14 学生の他、将来的には卒業生や教職員もeポートフォリオを活用するというプランも特徴的である。

参考文献

菊地滋夫

- 2013 「学部学科を超えた他者との対話が切り拓く地平—明星大学における初年次教育の取り組み」『私学経営』465、pp.17-22、公益社団法人私学経営研究会。
- 2018 「初年次教育と小中高の取り組み—多様性を活かすアクティブラーニングの可能性」初年次教育学会編『進化する初年次教育』pp.20-31、世界思想社。

菊地滋夫・御厨まり子

- 2014 「学習意欲と自尊感情をいかに高めるか—学部学科横断クラスの効果と導入への課題」第7回初年次教育学会(口頭発表)。

中央教育審議会

- 2012 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)」文部科学省。

テット、ジリアン

- 2016 『サイロ・エフェクト』土方奈美訳、文藝春秋。

東京大学大学総合教育研究センター

- 2012 「学生から見た東京大学—3つの大学生調査から」<https://www.he.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2014/04/3d392a536e624d84f35ebad98a43b56d.pdf>(2020年12月9日アクセス)

エリザベス＝パークレイ、クレア＝メジャー、パトリシア＝クロス

- 2009『協同学習の技法—大学教育の手引き』安永悟監訳、ナカニシヤ出版。

安永 悟

- 2013 「協同学習—授業づくりの基礎理論」初年次教育学会編『初年次教育と未来』世界思想社。